

大型類人猿情報ネットワーク（GAIN）の活動紹介：WEBによる情報

発信と遺体の有効活用

○綿貫宏史朗¹，落合知美¹，西村剛¹，今井啓雄¹，伊谷原一²，友永雅己¹，松沢哲郎¹（¹京都大学霊長類研究所，²京都大学野生動物研究センター）

Information transmission on the Web and effective utilization of the dead apes by Great Ape Information Network (GAIN)

○Koshiro Watanuki¹，Tomomi Ochiai¹，Takeshi Nishimura¹，Hiroo Imai¹，Gen'ichi Idani²，Masaki Tomonaga¹，Tetsuro Matsuzawa¹（¹Primate Research Institute, Kyoto University, ²Wildlife Research Center, Kyoto University）

〔目的〕「大型類人猿情報ネットワーク（GAIN）」は、文部科学省「ナショナルバイオリソースプロジェクト（NBRP）」の一環として、2002年より活動を始めた。飼育個体の福祉と保全の推進や日本における類人猿飼育の情報蓄積、正確な個体群動態の把握などを目的に、国内飼育下の類人猿に関する個体情報を収集、管理している。情報のリアルタイムでの発信や、飼育個体が死亡後の遺体の有効活用の推進により、研究利用発展のための研究者と飼育施設とのネットワーク構築も目的としている。

〔材料及び方法〕これまでに日本で飼育されたすべての類人猿（チンパンジー、ボノボ、ゴリラ、オランウータン、テナガザル）の個体を対象とし、情報収集をおこなっている。日本動物園水族館協会より提供を受けたチンパンジー、ゴリラ、オランウータン、テナガザルの国内血統登録書をベースに、全国の飼育施設への訪問や資料収集により得た情報、リアルタイムで寄せられる情報を加え、作成している。収集した情報は、種や個体ごとのデータベースに登録し、最新の情報をWEBサイト（<http://www.shigen.nig.ac.jp/gain>）で公開している。飼育施設から寄贈された試料は、WEBサイトから登録可能なGAIN登録研究者に対し、京大霊長類研究所「共同利用・共同研究拠点制度」のもとで利用可能としている。

〔結果〕チンパンジー326個体、ゴリラ25個体、オランウータン47個体、テナガザル161個体が日本国内で飼育されており（2013年6月28日現在）、過去の飼育個体も含め、リアルタイムの個体情報をWEBで公開している。遺体の有効活用について、2012年度中は動物園などで19個体の類人猿の死亡例があったうち、11個体についてGAINに提供を受けた。2013年2月4日に姫路セントラルパークで死亡したチンパンジー（ユウタ、オス、24歳）の例では、死亡当日にGAIN連絡を受け、遺体と臓器の提供を受けた。霊長研に搬入後、内臓等は3名の研究者に配布された。今後、筋骨格系の解剖や、CT撮影なども予定されている。遺体の活用による研究の成果は、霊長類ゲノムデータベース（京大GCOE）やデジタル形態博物館（京大霊長類研究所）ともリンクし、個体情報のさらなる充実も進めている。

〔考察〕GAINにおいて統合、処理された情報は、飼育や研究のための資料として重要なだけでなく、個体群の維持管理や動物福祉の推進にも貢献すると期待される。野生動物医学の分野でも、GAINの情報や制度がいつそう活用されることを期待し、活動紹介として発表したい。